

日本工学会による戦前の工業博物館設立計画 / 馬淵浩一、21 巻 1 号、1-15 (2017)

本論文は、1933 (昭和 8) 年に日本工学会が計画した工業博物館設立計画に関する論考である。この博物館は工業教育改革を目的にドイツ博物館をモデルとしていた。

第一次世界大戦により、日本の機械工学者らは、科学を基とした技術ならびに大量生産技術の確立が日本の工業発展と国防の上で重要という認識を持った。これに対し、機械学会などの学術諸団体は、生産技術者と職工長の増員を目指す工業教育改進黨を提案するようになった。そうした工業教育改進黨の中には工業博物館の設立を提案するものもあった。科学を基とした技術の公衆理解増進と将来の工場労働者を育成することが期待された。その結果、政府は東京科学博物館を 1931 (昭和 6) 年に設立したが、自然史部門の資料が工業部門の展示を圧倒していたことから、機械工学者はこの博物館に失望した。

本研究の結果、以下の 4 点が明らかになった。

1. 機械学会による提案を日本工学会が引き継ぎ、ドイツ博物館をモデルとした工業博物館を設立することを提案した。これは東京科学博物館とは異なるものであった。
2. 日本工学会は政府と民間からの資金を得る見通しを立て、ドイツ博物館と強いつながりのある斯波忠三郎の唱導によって工業博物館計画を進めた。
3. 機械工学のみならず電気工学、応用化学、建築学などあらゆる分野の工学者が参画し、この工業博物館を実現しようとした。このことは、工学者、技術者らが自分たちの提案を政策に反映させようとする技術者運動が 1930 年代に高揚したことを示している。
4. 結局は、資金不足でこの工業博物館は実現しなかった。